

海岸線の変化に伴う漁業集落の空間構成の変容に関する研究 —長崎県壱岐市勝本浦正村地区を事例として—

Changes in Spatial Organization of Fishing Villages caused by Coastline Change A case study of Katsumoto district, Iki city, Nagasaki prefecture

森田健太郎*, 黒瀬武史**

Kentaro MORITA, Takefumi KUROSE

The purpose of this research is to investigate and analyze the change of the coastline in the historical urban area and the change of the space composition of the village. By clarifying the relationship between the change of coastline by landfill and the change of the space composition of village, we think that knowledge useful for future fishing port maintenance will be obtained. In the 1970s, the coastline of many fishery settlements was reclaimed to secure roads, fishing boat berths, hauling places, facilities construction sites. These landfill constructions have had a great influence on the presence or absence of bustling settlements, living environment, and business.

Keywords : Coastline, Fishing village, Densely built area, Space composition, Iki

海岸線, 漁業集落, 密集市街地, 空間構成, 壱岐

1. はじめに

1.1 背景と目的

1950年代から九州北西部一帯の漁村集落の海岸線には、当時の漁業に対応して形づくられたタナと呼ばれる竹のテラスが存在していた^{1) 2) 3)}。しかし1970年代になると自動車が大衆に広く普及し、多くの漁業集落の海岸線は埋め立てられ、道路が造られた。さらに漁船を停泊させる荷揚げ場や海岸施設の建設地確保のため埋め立てが進んだ。これらの海岸線の工事は、集落の賑わいの有無、居住環境、商い、生活にも大きな影響を及ぼした。

本研究は、歴史的な市街地における海岸線の変更と集落の空間構成の変容を調査・分析することを目的とする。

漁業集落に関する既往研究は、生業としての漁業に重点を置き、集落や民家の特性について考察した研究^{4) 5) 6) 7)}や自然環境に主眼を置き、それに対する空間の特性を考察した研究⁸⁾がある。壱岐においては、散居集落の土地利用と空間構造を考察する研究^{9) 10)}、隠居慣行についての研究¹¹⁾があるが、本研究は、壱岐北部の漁業集落である勝本浦正村地区の構造の変容を、漁港整備に伴う動線の変化や民家1階の平面構成の変化に着目して分析する点に特徴がある。

1.2 壱岐勝本浦正村地区の概要

勝本浦は、対馬海峡に面した壱岐島の北端に位置して

おり(図1)(図2)、東西1.5km、南北1km、人口約2千人、約840世帯(2018年4月時点)の漁港である。

勝本浦の全体の構造は、海岸線から平行に1本入った帯状の1本道の両側に住居の軒が連なり、間口が狭く奥行きが長い、平入りの町家づくりの建物が並ぶ。地形は、U字型に湾曲した海岸線の北側に海、南側に丘陵が続く(写真1)。海岸線が湾曲しているため、長方形や台形と様々な平面形状の町家が勝本浦の特徴である。

勝本浦は、古代から大陸交通の重要な港で、土肥くじら組を主体として栄えてきた。勝本浦の正村地区には、朝鮮通信使の迎撃館があり^{注1)}、その後、土地の一部が土肥くじら組に貸与されることになった。土肥くじら組は、その土地に和歌山県太地からの刃(もんめ)差し^{注2)}40名を正村の地に移し住ませた²⁾。これらの漁師が捕鯨後も居ついて、今日の正村ができたと考えられる。



図1 壱岐島の位置



図2 勝本浦の位置

* 都市共生デザイン専攻博士後期課程

** 都市・建築学部門

1.3 研究方法

正村地区は、1969年に明治大学の神代雄一郎研究室によって、実測調査が行われた^{1) 3)}。建築的構成、祭礼や正村集体の共同体構成にみられる特色まで調査報告されている。本研究は、現在の海岸線と漁業集落の空間構成を実測調査及びヒアリング調査し、神代研究室の調査報告との比較検討を行い、集落の変容を考察する。表通りより浜側住居および海岸道路、荷揚げ場等の実測調査およびヒアリング調査は2017年6月、7月、8月、10月に実施し、表通りより陸(オカ)側住居の調査は2018年5月に実測調査、ヒアリング調査を行った(写真2)(図3)。なお、本論文では祭礼等の変容は比較検討しない。

2. 勝本浦の海岸線の変化

1957年より海岸線の埋め立て工事が開始した。大きく分けて4期に分けられる(図4)。第1期工事(1957年～1963年)は主に防波堤、岸壁、荷揚げ場が造られた。第2期工事(1969年～1978年)は、岸壁と海岸道路。第3期(1979年～1988年)は防波堤、荷揚げ場、野積場、漁協建設敷地、車道。第4期(1990年～2002年)は防波堤と浮棧橋であった。

第2期工事の中、正村地区の埋め立て工事は、表通りを境に浜側住民と陸側住民の意見の違いの為に着工が遅れた²⁾。筆者の聞き取り調査により意見の違いの詳細、打開策が分かった。浜側の住民はタナからすぐ船が付けられるので、そのまま都合が良く、埋立てに反対していた。一方で陸側の住民は、海岸道路と荷揚げ場が設けられることにより自分たちも自由に船を付けられるので、埋立てに賛成した^{注3)注4)}。最終的には、荷揚げ場の地先に係留する権利は、以前と同様に浜側の人が優先的に使用できることで了承を得て、着工となった。第4期以降も少しずつ埋め立て工事が続いており、2017年には、漁船に乗り降りするための浮き棧橋が建設された。

3 正村地区の海岸線の変化とタナ空間の変容

3.1 海岸線とタナの構造と役割

1950年代までの勝本浦の海岸沿いには、道路はなく、住宅の敷地が直接海に面していた。その敷地の海岸線沿いには、竹で造られた地面と同じ高さで海に張り出したタナが存在していた(写真3)。タナの幅は約3～7m、奥行き約3～5m、互いに隣のタナと接していた。漁船はそのタナにつながれており、漁船の衝撃をやわらげる役割もある。そのタナの上は、女性たちがイカ干す作業場であり、子供達の遊び場でもあった^{注5)}。

この時代の海岸線沿いは多くの漁船が並び、浜側の住民は、敷地内に所有するタナに船を停泊させていた¹⁾。一方、陸側の住民は海に面していないため、漁船を浜側の住居のタナに停泊させてもらわなければならなかった。

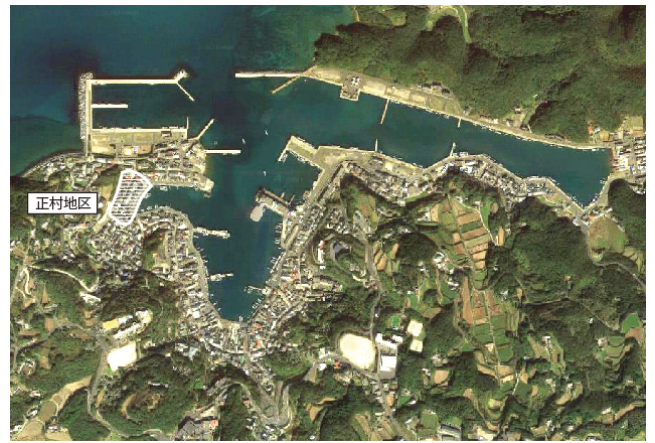


写真1 勝本浦全域航空写真⁴⁾と正村地区の位置を印す



写真2 正村地区と海岸線(2017年)¹²⁾

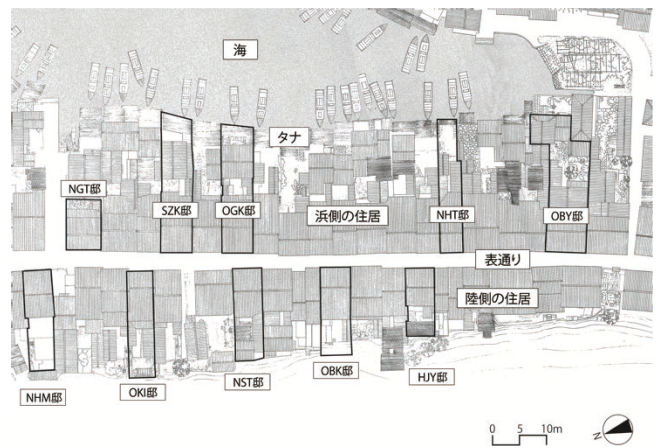


図3 本研究の調査対象住居(1969年神代研究室資料に基づき筆者作成)

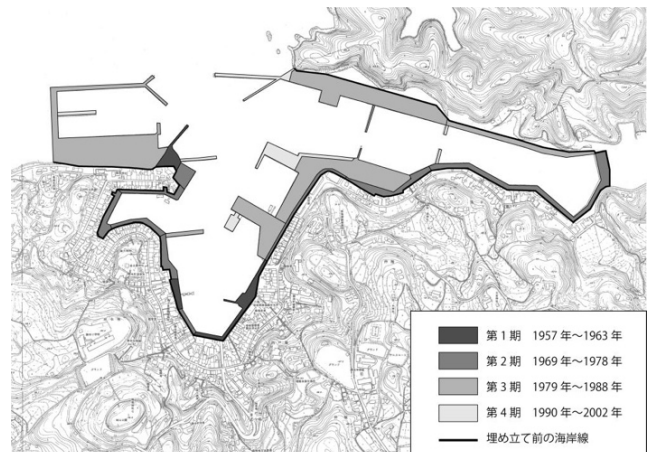


図4 勝本浦の埋め立て年代(長崎県道路課資料に基づき筆者作成)

3.2 タナの消滅と海岸道路の建設

タナは、漁業を商いにする漁家にとって不可欠なものであった。しかし、1970年代後半頃になると勝本漁協で競りが開始され²⁾、イカが生で出荷できるようになったため、イカを干して加工する必要がなくなった。その結果、海岸道路(写真4)の建設と同時にタナが役割を終え、タナがあった場所は駐車場に転用された。

3.3 海岸線の変化と変わらない空間構成に関する考察

海岸道路の建設により集落内の人々の生活に変化が生じたが、変わらなかったものがある。それは船を地先に係留する権利である。2章で述べたように埋め立て工事の着工が遅れた理由として浜側と陸側の意見の違いがあったが、浜側の地先の係留権を保つことを条件に両者が合意に至った²⁾。

埋め立て工事以前、浜側住居には、タナの地先に船を係留する権利^{注6)}が存在していた。埋め立て工事により、タナが消失した後も、浜側の住民は、地先の荷揚げ場に優先的に船を係留できることがヒアリング調査で明らかになった^{注7)}。船を停泊させている漁家は、荷揚げ場の一部に漁具を置くこともできる。但し全ての空間を利用するのではなく、歩行者の邪魔にならない程度に利用している(図5)。

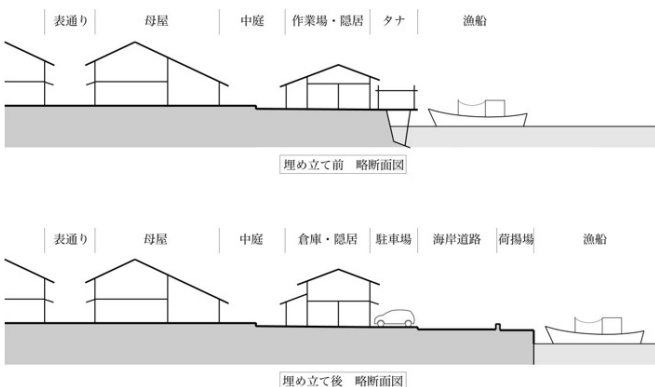


図5 埋め立て前後の正村地区の概念図



写真3 タナのある海岸線(1969年)³⁾ 写真4 道路のある海岸線(2017年)

4. 埋め立て前後の漁業集落の空間構成の比較

4.1 1969年の漁業集落の空間構成

ここでは、参考文献1), 2), 3)に基づき1969年当時の正村地区の空間構成を整理する。表通りから中庭までをつなぐ「ニワ」と呼ばれる土間がある。その土間に面して通り側より「オモテ」、「ナカノマ」、「ザシキ」と室が続く(写真5)。

オモテの通り側には窓があり、木格子が施されている。オモテは、主婦の室内家事労働の場所であり、漁具や雑貨の商いをする家では、このオモテが店となる。オモテと土間は、舞良戸で仕切られている。ナカノマと土間は開け放しで一体の広い空間が形成され、主婦と子供たちの社交的な場的な空間である。ザシキと土間は壁で仕切られており、夜の漁から帰った男衆が仮寝をする部屋であり、神床と箆置場がある²⁾。ザシキの奥に縁側があり「ナカニワ」「インキョ」「カンソウシツ」へと続く。

ナカニワには、奥深い家屋配置に対応するための光や風を取り入れる役割があり、換気が必要なフロとベンジヨもある。また家事の場としても利用された。インキョは壱岐に存続する居住形態で、正村地区では中庭を挟んだ別棟に住みながらの同居という形態であった¹¹⁾。カンソウシツとは、捌いたイカを干すための空間で炭や練炭を焚き乾燥させた。



写真5 正村地区の表通り(1969年)³⁾ 写真6 正村地区の表通り(2017年)

4.2 浜側住居の空間構成の考察

神代研究室が調査をした図面を基に、現在の浜側住居の空間構成について調査を行った。過去と現在で典型的な空間構成のパターンを見ることができた。調査住居は、内部外部共にほとんど当時の建築のまま保存されているOGK邸、OBY邸、外部は改装したが内部構造は当時のまま保存されているNGT邸、SZK邸、NHT邸の5軒である。1969年の1階平面図を図5に表す。1969年は、表通りから母屋、ナカニワ、インキョ、タナ、漁船という順である(図6)。

2017年の1階の空間構成を(図7)に表す。2017年は、表通りから母屋、ナカニワ、インキョ、駐車場・物干し場、海岸道路、荷揚げ場、漁船の順であった。

今回の調査住居5軒に共通して、母屋の土間空間が変化していることが分かった。元々、表通りから玄関引戸

を開けると中庭まで見通せるニワ（土間）があった。土間の隣地壁側には、上部に神棚、下部に味噌桶、米びつ、その奥には夏場だけ使用する小さな板張の食事場があった。さらに奥には、煉瓦積みのカマド二基、炊事場、水槽が並んでいた²⁾。しかし、今回の調査では、全ての住居の土間に床が張られ、靴を脱ぐ玄関、廊下、リビング、ダイニングやキッチンが設けられていることが確認された。またナカニワに面して勝手口が設けられていた。

4.3 陸側住居の空間構成の考察

前節と同様の方法で現在の陸側の住居の空間構成の調査も行った。調査住居は、内部外部共にほとんど当時の建築のまま保存されているH J Y邸、外部は改装したが内部構造は当時のまま保存されているOK I邸、外部は一部改装し、内部構造も改修されているNST邸、NH M邸、OB K邸の5軒である。1969年の1階の空間構成を図8に表す。1969年、浜側住居は、表通りから母屋、ナカニワ、インキョ、タナ、漁船という順であるのに対し、陸側は母屋、ウラニワであった。但しウエンヤマの斜面にタナを設けている例もあった。

2018年の1階の空間構成を図9に表す。浜側住居は、表通りから母屋、ナカニワ、インキョ、駐車場・物干し場、海岸道路、荷揚げ場、漁船の順であったのに対し、陸側住居は、母屋、ウラニワ、物干し場またはインキョという順であった。陸側の敷地は奥行きがなかったため1969年には別棟でインキョが存在しなかったが、今回の調査では、ウラニワのスペースを利用しインキョが建てた事例も見られた。インキョがない住居は、母屋に同居である。

今回の調査住居5軒中母屋の土間空間が変化している住居は2軒のみであった。4軒の住居に土間が残っていた。また2軒の住居の表通り側に駐車場が設けられていた。浜側住居は海岸線の道路側にあったタナが駐車場に変化した。陸側の住居は表通りしかアクセスできる道路はないため、表通りに面したオモテを取り壊し駐車場にしている。現在でも駐車場を持たない住宅は、少し離れた広場や海辺または表通り沿いに発生した空き地を借りて駐車している。

4.4 海岸線の変化と空間構成の変容に関する考察

埋め立て工事以前まで浜側住居の母屋は、ニワ（土間）を裏まで通すことが、生活する上で不可欠なものであった。海岸道路が完成するまで陸側の家の人々は、自分の船を浜側の家の海岸に停泊していた。そのため自分の船に乗るには、浜側の家のニワを通らなければならなかったからである。しかし海岸線の埋め立て工事でタナがなくなり、海岸道路と荷揚げ場が造られたことにより、浜側の家のニワを通る必要がなくなった。ニワが必要なくなった為に、ほとんどの家に玄関が造られ、ニワに床板を張った炊事場、食事をする場と変化していった。母屋

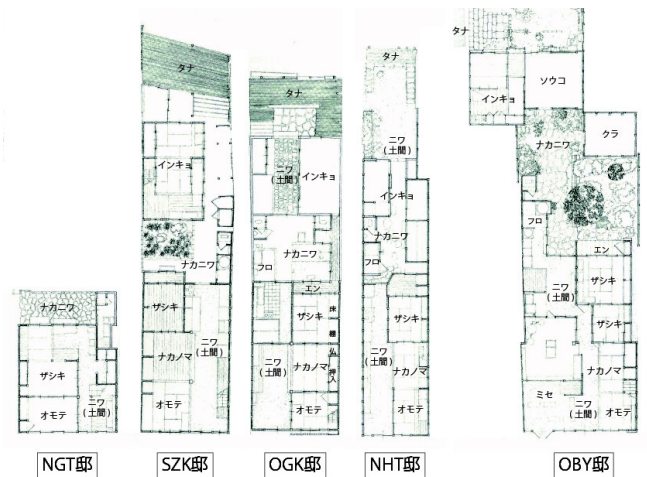


図6 正村地区の浜側住居1階の空間構成(1969年神代研究室)

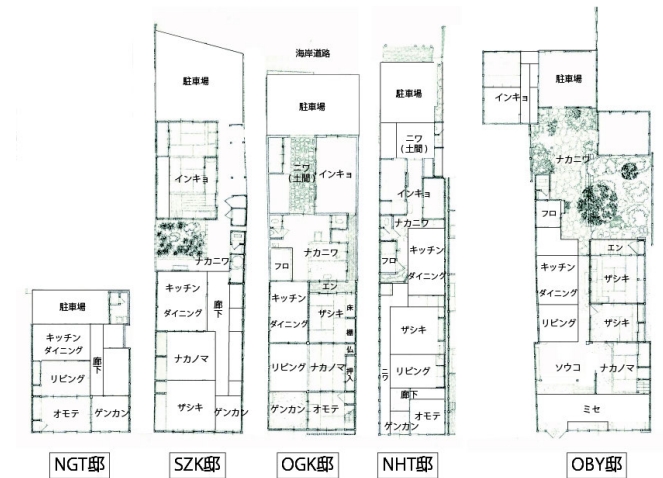


図7 正村地区の浜側住居1階の空間構成(2017年筆者調査)

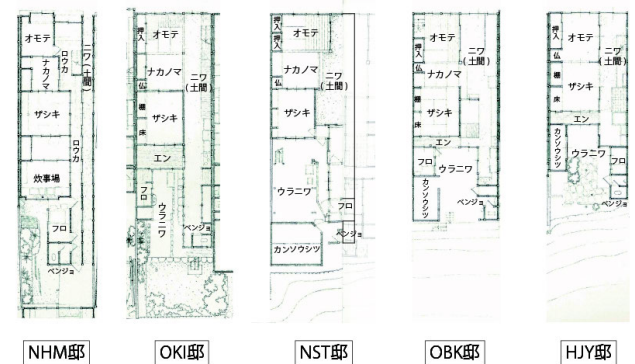


図8 正村地区の陸側住居1階の空間構成(1969年神代研究室)

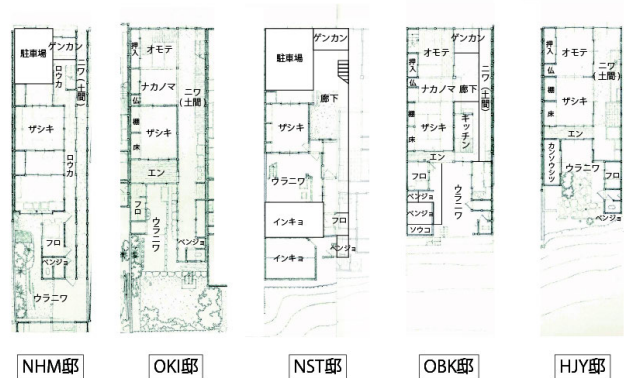


図9 正村地区の陸側住居1階の空間構成(2018年筆者調査)

のニワに床を張ったとしてもインキョの土間を通り濡れた体でフロ、ベンジョまで行くことができた（図 10）。

一方で陸側住居には、土間が残っていた。以前のままを保つ土間が2軒、幅を狭くしたものが2軒確認できた。理由としては、漁を終え帰宅した後、濡れた体のままフロ、ベンジョのあるウラニワまで行けることや漁具をウラニワまで運べることであった。これらの利便性が理由であることがヒアリングでわかった。

また浜側住居は、タナが駐車場に変わったので自動車が普及した後も駐車スペースを確保できたが、陸側の住居は駐車スペースを確保できないため、不便な生活を強いられねばならなかった。そのため改修のタイミングで表通り側に駐車場を設ける住居が数軒見られた。

浜側住居は、母屋とインキョの間にあるナカニワを保持しており、陸側の住居もウラニワを保持していたことがわかった。ナカニワ・ウラニワは、室内に光を入れるため、室内の通風を得るため、洗濯物の干場、便所や風呂の換気のため、様々な機能があるので現在でも生活する上で不可欠な空間であることがわかった。



写真7 ニワ(土間)(1969年)³⁾



写真8 ニワ(土間)(2017年)

5. おわりに

本研究では、海岸線の変化に伴う漁業集落の空間構成の変容を明らかにした。正村地区では、集落の空間構成の変化に、海岸線の埋め立て工事が深く関わっていたことが分かった。また工事の時期は、漁業の盛漁など好況の時代とも重なり、多くの住居で改築改装が進められた。

埋め立てに伴い海岸道路（公空間）が完成し、陸側の漁家は浜側住居のニワを通過することなく、海岸道路を通過して直接漁船までアクセスできるようになった。そのため、浜側住居の母屋のニワには床が張られ、生活空間の近代化が進んだ。ただし、海岸道路からナカニワまでの土間は残され、船からフロや漁具置き場のあるナカニワまで濡れたまま行くことができる形態は保持された。

一方、陸側住居でもニワに床が張られたが、ウラニワまで半間の土間が残され、漁家の作業空間であるウラニワまで下足で行くことができるように工夫されている。

凡例

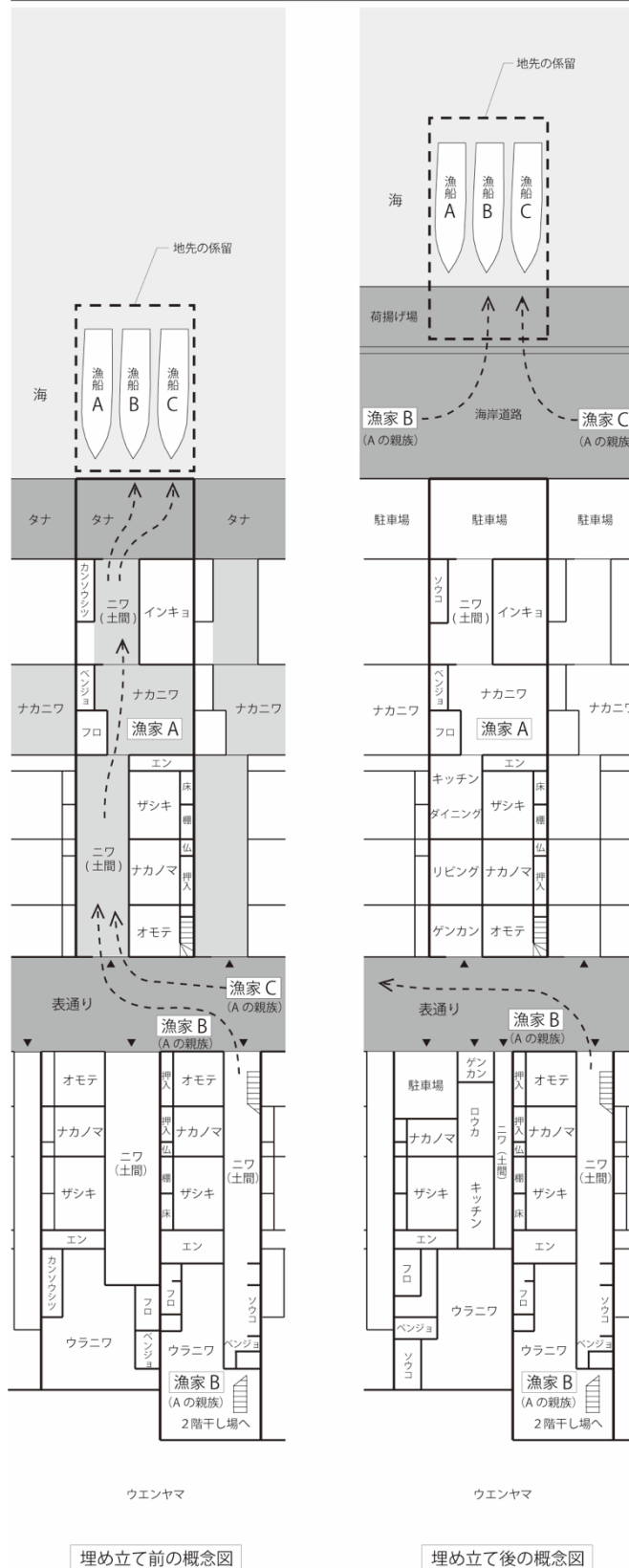
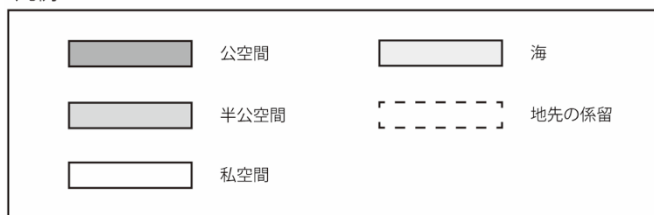


図10 埋め立て前後の正村地区の空間構成

海岸道路の開通と生活の近代化に伴い、自動車の利用が広がり、駐車場のニーズが生まれた。浜側住居は、埋め立て工事に伴い建設された海岸道路側のタナの跡地を利用して、駐車場を確保した。陸側住居は、表通り側の部屋を改修し、駐車場を造った住居が調査住居5軒中2軒存在した。なお、本研究では詳細な調査は実施していないが、陸側住居では、駐車スペース分セットバックして建て替えられた住居や、住居が解体され駐車場となっているスペースもあり、陸側は軒の連続性が損なわれている場所が見受けられる。

勝本浦では、2007年より壱岐市勝本浦街なみ環境整備事業^{注8)}も始まった。正村地区でも表通りの沿道は、ファサード改修が進められ徐々に景観が整いつつある。一方で漁業の衰退により、漁船数の減少が著しい。埋め立て当時は地先の係留が議論を呼んだが、現在はどこにでも停泊できる程度の漁船数にまで減少した。今後も漁船数が減る傾向であるが、漁港整備が進められている^{注9)}。

正村地区では、埋め立てを伴う漁港整備と同時期に伝統的な集落景観であるタナは失われたが、埋め立て前からイカの出荷方法が変化しており、漁業の近代化もタナの消滅と関係していることがわかった。また、漁港整備により生まれた海岸道路に自動車交通が移ったため、表通りの民家の形態は従来の構造を残していることも明らかとなった。1970年代から始まった漁港整備は、集落の空間構成に大きな変化を与え、特にタナ空間の消滅の直接の原因となったが、同整備によって漁業の近代化や海岸以外の集落空間の維持に寄与した可能性が高い。壱岐の集落に対して公的資金を用いて行われた社会基盤整備が与えた正負の影響を慎重に検討し、調査、研究を続けていきたい。

注

注1) 江戸期には、朝鮮通信使が往路11回、帰路8回入港している。迎接のため2500坪の敷地を造成し、新しく迎接館が造られた。

注2) 捕鯨の重要な仕事をする人

注3) 聞き取り調査：勝本浦正村地区住民の尾形福三氏
2017.10.22

注4) 参考文献2)によると、陸側の人たちは、バスが通りやすくなる、消防の危険区域だからなど、色々理由をつけて埋め立てに賛成した。その当時の住宅は、一部の屋根がワラだった場所もあり、火事が起こりやすい環境であった。しかし火事は一度もなかった。火事が起こりやすい状況だったので住民は皆注意して生活をした。

注5) 聞き取り調査：勝本浦正村地区住民の尾形一成氏
2017.10.22, 尾形氏によると、大人たちが針金で竹を繋ぎタナ造りをしている時にその手伝いをする

のが子供達の楽しみの一つであった。

注6) 浜側の漁家が優先的に海沿いを利用できる権利。

注7) 暗黙の了解でAの船付き場を空けておいてくれる。他の船は、勝手に止めない。

注8) 歴史的建造物の適正な管理や活用、公共施設の整備、個人住宅の修景整備等を行い、漁村集落の勝本浦らしい魅力あるまちなみ整備を進めることにより交流人口の拡大と地域の活性化を図る制度。

注9) 漁船の乗り降り、荷降ろしを容易にするための浮棧橋の建設。

参考文献

- 1) 神代雄一郎：漁村集落のデザイン・サーヴェイ 壱岐勝本浦正村, 明治大学科学技術研究所紀要, pp. 143-156, 1970
- 2) 川谷幸太郎：勝本浦郷土史, 1996. 12
- 3) 明治大学神代研究室：「海を渡る神 烏賊を干すたな」デザイン・サーヴェイ/壱岐勝本, 建築文化, pp. 113-136, 1970. 9
- 4) 地井昭夫：漁業集落の研究とその方法についての考察, 日本建築学会論文報告集, 第237号, pp135-145, 1975. 11
- 5) 宗正敏, 宮崎隆昌：沿岸漁村地域に於ける集落の構成とその特性, 日本建築学会論文報告集, 第270号, pp117-125, 1978. 8
- 6) 塩谷寿翁, 月形秀和：漁村住宅の建築的構成と住生活の変容に関する研究, 日本建築学会論文報告集, 第302号, pp129-143, 1981. 4
- 7) 小泉正太郎, 三国正勝：漁業地区における住居及び近隣の空間形成に関する研究, 日本建築学会論文報告集, 第312号, pp123-132, 1982. 2
- 8) 岡野崇裕, 畔柳昭雄, 中村茂樹：沿海多雨・多雪地域に立地する舟小屋を有する集落の生活空間特性に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第526号, pp131-138, 1999. 12
- 9) 加藤仁美：散居集落の形成と土地利用パターン-壱岐島における散居集落の土地利用と空間構造に関する研究-その1, 日本建築学会計画系論文集, 第433号, pp129-136, 1992. 3
- 10) 加藤仁美：触と講中の社会的特性と散居集落の空間構造-壱岐島における散居集落の土地利用と空間構造に関する研究-その2, 日本建築学会計画系論文集, 第449号, pp69-78, 1993. 7
- 11) 上和田茂, 船越正啓：長崎県壱岐島における隠居慣行の様相-隠居慣行の継承と変容に関する研究-その2-, 日本建築学会計画系論文集, 第76集 第669号, pp2041-2048, 2011. 11
- 12) Google Earthより取得:2014.10.25 撮影画像